

審査の結果の要旨

氏名 植上一希

専門学校は1975年の制度化以降、中等後教育機関として発展を遂げ、今日では60万人の青年が学ぶ教育機関としての地位を確立している。しかし、専門学校教育の実態を明らかにする研究は進んではおらず、「就労」のための「即戦力」の人材を育成する、大学の「代替的進学」先という見方が定説化されてきた。本論文は、この観点に疑問を呈し、専門学校を青年の多様な人生選択と自己形成のルートの一つととらえ、青年期教育の一環に位置づけてきた社会教育研究の流れを汲んで、専門学校の教師や学生など当事者の語りから、その教育の特質を描き出し、新たな専門学校像を生成しようと試みたものである。

本論文の構成と概要は以下の通りである。序章では、先行研究の持つ専門学校像とその背景が示され、専門学校が正規の学校の傍系と位置づけられてきたことが指摘される。その上で、当事者の語りによって専門学校教育の内実を明らかにすることが本論文の目的とされる。第1章では、制度化以降の専門学校の動向がとらえられる。専門学校は制度化以後90年代半ばまで、急速な拡大と地位の向上を実現してきたが、その後、学生数が減少する中で、新たな自己規定を模索していることが指摘される。第2章では、専門学校教育内容を規定する要素が、教員の語りから描かれる。制度的な制約から、即戦力の育成は困難であり、カリキュラム編成そのものが学生たちの人間形成の土台となる能力の育成を重視していることが明らかにされる。第3章では、専門学校生がどのような経緯で、いかなる要求を抱いて進学してきたのかが、学生自身の語りから記される。進学者は学力や経済力など様々な制約条件の中で、具体的な人生イメージを描いて、専門学校を主体的に選択している姿が示される。第4章では、専門学校生が在学中にいかなる学びをし、どのように成長しているのかが、彼らの語りから構成される。彼らは専門学校での学習過程で、自分の人生を設計し、選択するという成長を示していることが描かれる。第5章では、卒業生たちは専門学校における学びをどのように意味づけているのかが示される。時間の経過とともに、専門学校の職業教育的な意義が薄れ、人間形成的な意義を強く感じていることが描かれる。終章では、専門学校が当事者にとっては、人生選択と深く関わる人間形成的な側面を強く有した中等後教育機関であることが示される。

本論文は、従来、専門学校を評価する際に見落とされていた人間形成的な側面を当事者に対する綿密なインタビューによって掘り起こすことに成功している。インタビュー対象者の一層の拡大や他の教育機関との比較など、今後の検討課題は残るものの、専門学校という通常は傍系と位置づけられがちな教育機関の実態に深く踏み込み、新たな専門学校像を提示したことには、明らかに独自性と学術的・政策的意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。